

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

難儀にあつたお薬師様
がっこんじ、がっこんじ

青倉山の不思議な水
祠の滝が目をいやす

伝説

難儀にあつたお薬師様
がっこんじ、がっこんじ
青倉山の不思議な水
祠の滝が目をいやす

紀行

朝来の神仏と文化財をめぐる

- ・ 古代の道が交わる地
- ・ 南但馬の王墓
- ・ 八子と薬師様
- ・ 青倉山を登る
- ・ そびえ立つ巨岩と流れ落ちる滝
- ・ 生野から播磨路へ

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

歴史博物館ネットミュージアム
ひょうご歴史ステーション

難儀にあったお薬師様 がっこんじ、がっこんじ



何百年か昔、楽音寺（がくおんじ）というお寺にどろぼうが入りました。「何か金目のものはないか」と探しているうちに、お祭りしてあった一尺二寸（四十センチほど）ばかりの金のお薬師様が目につきました。お薬師様は、病気を治してくれる仏様で、手には薬が入った小さな壺（つぼ）を持っています。

「よしよし、こいつは金になるぞ」

どろぼうはそう言うと、お薬師様をつかんでそのままにげてしまいました。

どろぼうは、遠くまでにげると、お薬師様を鍛冶屋（かじや）に持って売り飛ばしました。この鍛冶屋も悪い人だったので、買い取っ薬師様をとかして、金のかたまりにしておもうと考えました。

さっそく火をおこしましたが、どんなに火をたいてあぶっても、お薬師様は少しもとけません。おこった鍛冶屋は、それなら金づちでたたいてつぶしてやろうと、大きな金づちを持ち出しました。そして大金づちをふりあげると、力いっぱいお薬師様をたたきました。ところがお薬師様は少しもへこんだりしません。「ええい、このやろう」と、たたくと、こんどはたたくたびに、お薬師様が「がっこんじ、がっこんじ」とおっしゃるではありませんか。



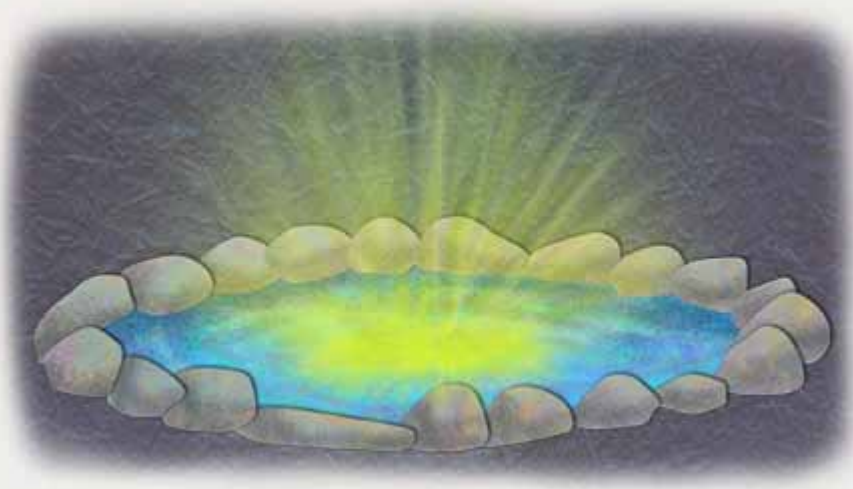
鍛冶屋はびっくりしてこしをぬかしました。

「こんな仏様をつぶしたりしたら、ひどいばちがあたるかもしれん」

こわくなった鍛冶屋は、日が暮れるのを待って、お薬師様をかかえるとこっそり楽音寺までやってきました。そして、お堂のそばにあった弁天池に、お薬師さまを放りこんでにげてしまいました。

それから何日か後のことです。ちょうど日暮れ時に遠坂峠（とおざかとうげ）を歩いていた旅人が、楽音寺のあたりをながめていると、何かぴかぴかと光るものが見えます。「いったい何だろう」と思いながら、その光るものを目指して歩いていると、弁天池に行き当たりました。

光は、池の中からさしています。



旅人はおどろいて、お寺のお坊（ぼう）さんのところへ飛んでゆきました。話を聞いたお坊さんが、村人にたのんで池の底をさらしてみると、なんと先日ぬすまれたお薬師様が見つかったではありませんか。

お坊さんはさっそく、お薬師様のために新しいお堂をたてて、ていねいにお祭りしました。

火で焼かれたり、金づちでたたかれたり、たいへんな難儀（なんぎ）にあったのに、無事にもどってきたお薬師様です。きっとどんな病気でも、けがでも助けてくださるだろうという話が、遠くまで伝わりました。それからというもの、近所だけでなくずっと遠い村からも、お参りする人が絶えなくなったということです。

青倉山の不思議な水 祠の滝が目をいやす

むかし、朝来（あさご）の伊由谷（いゆうだに）に、たいそう心の優しい、親孝行な息子が、年老いた父親といっしょに住んでいました。二人で小さな畑を耕すほかに、山に入って山菜や川魚をとって暮らしをたてていました。

ある春のことです。お天気がよい日を選んで、父親は近くの山へ入っていました。うどをとろうと思ったのです。うどが思いのほかたくさんとれるので夢中になってしまい、気がつくやうと遠く青倉山（あおくらさん）まで来ていました。

「あまりおそくなると、息子が心配するだろう」

父親は、うどを束ねて背負いましたが、立ち上がろうとしたとたん足がもつれて、よろよろとたおれてしまいました。すると運悪く、さきほど自分がかり取ったうどの株の上にたおれこんで、切り株で右目をさしてしまったのです。

右目からは血があふれてきます。ひどい痛さをがまんしながら、父親はけんめいに歩いて、ようやく家まで帰り着きました。

息子は、父親が血だらけの顔で帰ってきたので、おどろきました。小さな山の村ですから、もちろんお医者さんなどいるはずがありません。井戸（いど）の水で手ぬぐいをしばって、傷口を冷やしたり、いろいろと手をつくしましたが傷の痛みはひどくなる一方です。

とほうに暮れた息子は、必死になって神仏にいのりました。

そのうちに息子は、昼間のつかれもあつてうとうととねむりこみました。

「高い山の滝（たき）まで行って、その水を取ってきてつけなさい」

真っ白な衣を着た老人が、息子の夢の中に現れてそう言ったところで、息子ははっと目を覚ましました。

「何ともふしぎな夢だ。けれど、もしかすると神様のお告げだろうか」

そう思った息子は、ねむっている父親を近所の人にとのみ、山へ入って滝をさがしました。



ところが滝はなかなか見つかりません。必死になって山という山を探しまわり、つかれきった時、小さな祠（ほこら）を見つけました。

「ああ、もう一度神様にお願いしてみよう」

息子が祠の前で手を合わせようと近づいてみると、水音が聞こえます。ふと見上げると、祠の上に滝があるではありませんか。

「これが、お告げにあった滝にちがいない」

大喜びした息子は、その水をくむと飛ぶように走って家まで帰り、父親の目を洗ってやりました。

するとおどろいたことに、あれほどの痛みがすうっと消えてゆき、父親の目は元通り見えるようになったのです。



この話を伝え聞いて、目の病気で困っている人たちが、山へ登って滝の水を求めるようになりました。そしてたくさんの方が、ふしぎな滝の水で目を治し、喜んで帰ってゆきました。こうして青倉山の水は、目によい水として知られるようになったのです。

それ以来、青倉神社の氏子（うじこ）たちは、うどんを食べなくなったということです。

青倉山の不思議な水 祠の滝が目をいやす

おわり

紀行「朝来の神仏と文化財をめぐる」

古代の道が交わる地

都から日本海側へと延びる古代の山陰道と、播磨（はりま）から北へ続く但馬道は、朝来市（あさごし）の和田山町で交わる。山々にトンネルが掘られ、高速道路が平地を縦貫した現代からは想像もできないけれど、古代からこの道に沿って、どれほど多くの人や物が往来したことだろうか。きっと、さまざまうわさや物語、伝説もまた、行き交う人々によってもたらされ、運ばれていったのだろう。

この但馬道 現在で言うと国道312号線ということになるのだが に沿って、北から順に伝説の舞台を訪ねながら、いくつか文化財にも立ち寄ってみよう。

南但馬の王墓



茶すり山古墳（遠景）



茶すり山古墳（全景）



整備が進む古墳



雄大な墳丘

最初の訪問地は、旧山東町である。国道312号線の加都（かつ）北交差点を東へ折れて、県道136号線を走ると、1kmちょっとで道は豊岡自動車道の下を通るが、くぐり抜けたちょうどその場所にあるのが、茶すり山古墳である。

2002年に発掘調査がおこなわれたこの古墳は、直径が90mもある円墳で、円墳としては近畿最大、全国でも第4位という大古墳である。墳丘の一部は壊されていたが、幸いにも埋葬部は無傷で、見つかった二つの木棺からは、大量の副葬品が出土し、5世紀に築かれたものであることがわかった。朝来市和田山町にある、城ノ山（じょうのやま）古墳、但馬最大の前方後円墳である池田古墳などに後続する、但馬の王墓であることは疑いない。古墳は現在、整備工事がおこなわれており、見学できるようになる日も遠くないだろう。



墳頂から平野を望む



八チと薬師様

茶すり山古墳のふもとを過ぎると、間もなく低いながら峠道にさしかかる。ここが宝珠峠（ほうじゅとうげ）である。「宝珠」というとお寺に関係しそうな名前だが、調べてもその由来はわからなかった。ただこの付近では、高速道路の建設にともなって多くの遺跡が発掘されているから、宝珠峠を越える道が長い歴史をもっていることは間違いないだろう。峠を越えて緩やかな坂道を下ると、左手（北）に楽音寺の集落が広がっている。

楽音寺は、平安時代初期に創建されたとされており、楽音寺へと続く道の両側には、八チの像がたくさん飾られている。いったいなぜかといぶかしく思う人もいるかもしれないが、楽音寺の境内は、「ウツギノヒメハナバチ」という小さな八チが、大集団で営巣することで有名で、県の天然記念物に指定されているのである。

ご住職の藤本さんによれば、最近では巣の数がずいぶん減ったので、土を入れ替えて巣作りがしやすいように努力されているそうである。



楽音寺（全景）



楽音寺（門）



楽音寺（薬師堂）



薬師堂の内部



境内
(砂地はウツギノヒメハナバチ生息地)



焼けた薬師様は
木造の薬師様の胎内仏



焼けただれた薬師さま



上記3枚の写真は楽音寺提供

八チの巣を踏まないように、境内の端を通って薬師堂を拝見した。伝説のお薬師様は、秘仏で、25年に1度だけ開帳されるということである。その代わりにとお薬師様の写真を見せていただいたが、小さな像は半身以上が焼けただけで表面が栗立ったようになった部分もあり、思っていたよりずっとひどい様子であった。

盗人がこのお薬師様を放り込んだのが、楽音寺のそばにある弁天池だった。現在の楽音寺にも、南に接して弁天様がお祭りされた池があるのだが、藤本住職によると、本来の弁天池は、楽音寺の南側にある尾根を越えたところにあった池ではないかという。その池は、今はもう埋め立てられてなくなってしまったということであった。



池と弁天様のお堂



遠阪峠から楽音寺方面を望む



弁天池（看板）

今の弁天池からも、かつてもう一つの池があった場所からも、伝説にあったように遠阪峠（とおざかうげ）を遠望できる。

青倉山を登る



青倉神社の鳥居

楽音寺からもう一度国道312号線に戻り、4kmほど南下すると、道の左手（東）に、大きな石の鳥居が見える。これが青倉神社の鳥居で、道から見ると、鳥居の向こう側に青倉山の雄大な山体が見える。

この鳥居から、東の奥にある川上の集落を経るのが、青倉神社の正規の参道だと思うが、撮影機材を抱えた取材では徒歩というわけにもゆかないので、もう一つ南の多々良木（たたらぎ）から車で登る道を選んだ。



鳥居から見た
青倉山

国道から2kmほど東へ入ると、谷をせき止めた多々良木ダムが見えてくる。上流側にある旧生野町の黒川ダムから落下させた水で発電し、その水を多々良木ダムに蓄えて、再び黒川ダムへくみ上げるといふ、揚水式発電の下部ダムである。1974年に完成したダムは、普段は青い水をたたえているが、湧水期には湖底に沈んだ集落の跡が現れる。石垣や庭の木立、畑の跡など、ダムに沈んだ集落は、遠い未来には現代の暮らしを伝える遺跡になるかもしれない。

ダム湖の横を通り、次第に斜度を増す道を登ってゆくと、やがて青倉神社の駐車場が見えるので、そこに車を停めて山腹に建てられた神社を目指す。新しく設けられた参道を100mほど歩き、長くはないけれど急な石段を登らねばならない。

そびえ立つ巨岩と流れ落ちる滝

青倉神社の社殿はかなり風変わりである。普通なら、拝殿があってその奥に本殿があるのだが、ここは2階建てになっていて、お参りする人は靴を脱いで2階に上がり、畳の部屋に座って神様を拝むのである。



青倉神社（本殿）



本殿の入り口



長い階段を上る

実はこの社殿の裏手には、高さが10mを超える巨大な岩があって、社殿はその岩のすぐ前にぴったりとくっつけるように建てられているのだ。社殿一階の奥には、岩の根元が見えている。

社殿の右手から裏へ回ると、ご神体の巨岩の後ろには、幅10mほど、高さは20m以上ありそうな岩壁がそびえ、そこに滝が流れ落ちている。これが伝説に語られた、目の病気に効く水なのである。



本殿背後の巨岩

こけむした岩肌を流れ落ちる清冽（せいれつ）な水の音以外、何も聞こえない山奥である。ずっと昔、杣道（そまみち）を登りつめてきた人は、巨岩と水が織り成す光景に圧倒され、この場所こそ神が宿ると信じたことだろう。

伝説の地を訪ねると、しばしばこうした風景に出会い、そのたびに心が洗われるような気がする。



岩壁を流れ落ちる水

生野から播磨路へ

国道をさらに南へ走ると、旧生野町に入り、「椀貸し伝説」でも訪ねた新井の「椀貸し狐」、崎山稲荷（さきやまいなり）神社も遠くない。

さらに播但国境に至る手前には、2007年に開鉱1200年を迎えたという生野銀山があるから、ここまで訪ねてみてほしい。鉱山開発が始まったと伝えられる大同2年は、奇しくも、楽音寺の創建と同じ年である。この開鉱そのものは伝説的であるとしても、中世には山名氏がここに城を築いて銀山を掌握したとされている。その後は織田信長から羽柴秀吉を経て、徳川家の支配するところとなった。さらには明治時代へと、近世～近代日本で最も重要な鉱山の一つとして採鉱され続けた、兵庫県でも随一の鉱山と言えるだろう。また最近では、飾磨港と生野銀山を結んだ「銀の馬車道」も、近代化遺産の一つとして注目を集めている。

朝来市を縦断してきた「但馬道」は、ここから峠を越えて播磨国へと続いてゆく。



生野銀山（遠景）



旧坑道



生野銀山開坑略記

用語解説

山陰道（さんいんどう）

都から発し、丹波・丹後・但馬を経て山陰地方を結んだ、古代の主要街道の一つ。兵庫県下では、篠山市、丹波市、遠阪峠を通過して但馬に入り、朝来市、養父市、香美町、新温泉町を経由する。また養父市からは、豊岡市域に所在した但馬国府へ至る支線があった。

但馬道（たじまみち）

播磨国と但馬国を結び中国山地を貫く南北の街道。姫路を起点にして粟賀、生野、竹田、和田山、八鹿、納屋、豊岡を経て城崎まで、延長約95kmを測る。温泉として有名であった湯嶋（城崎）へ向かう道として利用されたほか、近世以降は、生野銀山と姫路を結ぶ産業道路としての性格も帯びるようになった。瀬戸内側では市川、日本海側へは円山川と並行して整備されていたので舟運とも競合していたようである。納屋（豊岡市日高町）から北へ城崎までの4里（約16km）の間は道路事情が悪いため、舟に乗るのがよしとされていた。

茶すり山古墳（ちゃすりやまこふん）

朝来市和田山町筒江に所在する古墳。5世紀前半に築造された円墳で、直径は90mを測り、円墳としては全国で第4位の規模である。北近畿豊岡自動車道の建設に伴って発掘調査がおこなわれ、頂上部に埋葬された2基の木棺から、畿内以外では初めてとなる「三角板革綴襟付短甲（さんかくばんかわとじえりつきたんこう）」をはじめ、多数の鉄製品、銅鏡、玉類などの副葬品が出土した。5世紀前半の但馬地域の王墓と考えられている。なお古墳は、道路の設計を変更して保存され、2007年現在整備工事中である。

城ノ山古墳（じょうのやまこふん）

朝来市和田山町東谷に所在する古墳。4世紀末に築造された円墳で、直径は36mを測る。長さ6.4mという長大な木棺を埋葬しており、人骨のほか、銅鏡6面、石製腕輪、玉類、鉄製品などが出土している。城ノ山古墳の築造は、南但馬における王墓の成立として重視されている。

池田古墳（いけだこふん）

朝来市和田山町平野に所在する古墳。古墳時代中期前半に築造された但馬地域最大の前方後円墳で、全長136m、後円部の直径76mを測る。1重の周濠（しゅうごう）をめぐらせる。埋葬施設は、古くからの土取り作業によって完全に破壊されているため不明。墳丘からは埴輪類が、周濠からは木製品が出土している。

楽音寺（がくおんじ）

朝来市山東町楽音寺に所在する真言宗の寺院。正覚山（しょうかくさん）と号する。本尊は薬師如来。寺伝によれば、807年の創建とされ、当時は七堂伽藍に12の僧坊を連ねた大寺院であったという。所蔵の経瓦は県指定文化財。また600平方メートルの境内は、ウツギノヒメハナバチの群生地として、県の天然記念物に指定されている。

用語解説

ウツギノヒメハナバチ（うつぎのひめはなばち）

ヒメハナバチ科に属するハチ。体長は10～13mm。学名はAndrena prostomias。年に一度、5月末～6月中旬に現われる。地中に巣を掘り、団子状の花粉を蓄えて幼虫の食餌（しょくじ）とする。

遠阪峠（とおざかとうげ）

丹波市と朝来市との境界にある峠。標高363m。古代山陰道にも、遠阪峠を越える路線があった。急峻で、特に冬季には雪が多い難路であったが、現在はトンネルが開通している。

青倉神社（あおくらじんじゃ）

朝来市川上に所在する神社。社殿は、青倉山中腹に露頭した巨岩の下に建てられている。祭神は稚産霊神（わくむすびのかみ：日本神話では穀物、養蚕の神）。創建年代は不詳。社殿背後の岩壁から流下する滝の水は、眼病に効果があるとして信仰の対象となっており、参拝者が多い。

青倉山（あおくらやま）

朝来市中央部に所在する山。標高は811m。中腹に青倉神社があり、当地の滝の水は眼病に効果があるとして信仰の対象となっている。頂上からの展望が良く登山者も少なくない。

生野銀山（いくのぎんざん）

生野鉱山（いくのこうざん）のこと。朝来市生野町に所在する鉱山。807年に発見されたと伝えられており、2007年で開鉱1,200年を迎えたという。室町時代末期から本格的な開発が始まり、織田信長、羽柴（のち豊臣）秀吉らの支配を経て、江戸幕府直轄の鉱山となった。明治29（1896）年からは三菱の経営となり、採掘が続けられたが、昭和48（1973）年に操業を終えた。現在、鉱山跡地は史跡に指定されており、生野鉱物館があって、旧坑道も見学可能である。

織田信長（おだのぶなが）

戦国時代末期、尾張の大名（1534～82）。父織田信秀の死後、尾張を継承し、大国であった駿河の今川義元を桶狭間の戦いで敗死させた。その後三河の徳川氏と結んで美濃へ進出し、斎藤氏を滅ぼした。1568年には、足利義昭を奉じて京へ上ったが、1573年にはこれを追放して、室町幕府に終止符を打った。同年には浅井氏・朝倉氏の連合軍を破り、1575年には長篠の合戦で武田勝頼を破って、本州の中央部を押さえ、最大の勢力を誇った。

1576年安土に築城開始。楽市楽座の実施により産業を振興したほか、城下でのキリスト教布教を認めるなど、西洋文化の導入にも意を注いだ。しかし中国地方への進出途上、家臣であった明智光秀に殺害された（本能寺の変）。

羽柴秀吉（はしばひでよし）

安土桃山時代の武将（1536～98）。尾張国中村の人。はじめ木下藤吉郎と名乗る。年少の時期から織田信長に仕え、戦功をたてて重用され、羽柴氏を称した。信長の命による中国地方経略の途上で、明智光秀による信長殺害（本能寺の変）が起こった。秀吉は毛利氏と和睦し、山陽道を経て淀川右岸を北上、山崎の合戦で光秀を破った。

その後、各地の大名を服属させた秀吉は、1585年に関白、翌年には豊臣姓を下賜され、また太政大臣に任ぜられて天下統一を達成した。晩年には、朝鮮および明への侵攻を図り、2度にわたって派兵したが失敗に終わった（文禄・慶長の役）。太閤検地による税制の確立、兵農分離政策、都市や主要鉱山の直轄支配など、幕藩体制への基礎をつくった。

用語解説

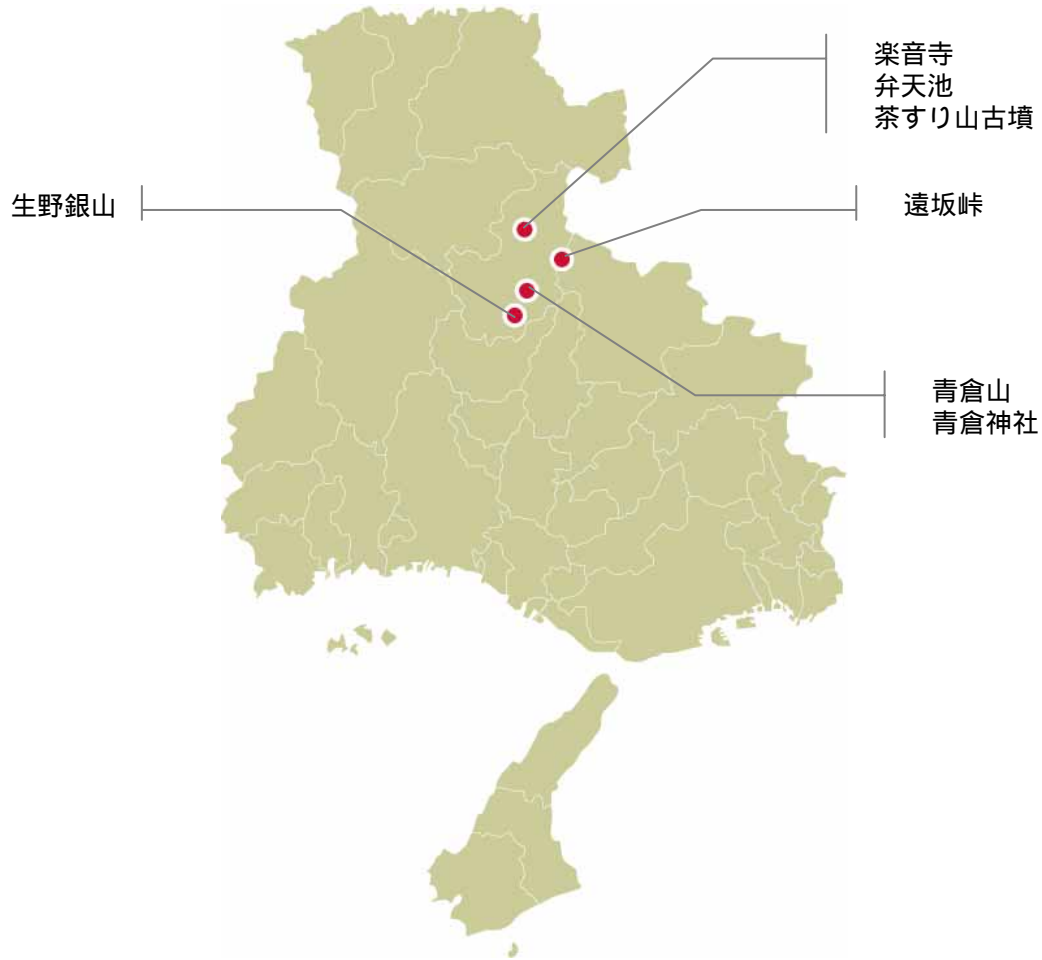
銀の馬車道（ぎんのばしゃみち）

旧生野鉱山寮馬車道の愛称。明治9年に朝来市生野町と姫路の飾磨港との間、市川沿いの約49kmを結んだ馬車専用の道路である。産出した銀を港に運ぶ一方、港から鉱山には精錬に必要な機械や石炭が運ばれた。欧米の最新工法を取り入れた馬車道は、幅約6m、日本初の高速産業道路とも言われる。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話但馬篇	1972	郷土の民話但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫県むかしむかし 西播・但馬	1974	兵庫県老人会連合会	兵庫県老人クラブ連合会
	兵庫の伝説	1980	兵庫県小学校国語教育連盟	日本標準
歴史・文化	兵庫のふるさと散歩4 但馬編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫県史考古資料編	1992	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	但馬の王墓 茶すり山古墳調査概報	2003	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編	学生社
その他	正覚山楽音寺(参拝者資料)	不詳	楽音寺	楽音寺
	南但馬まほろば紀行(観光用資料)	不詳	南但馬歴史・文化ミュージアム推進協議会	南但馬歴史・文化ミュージアム推進協議会

所在地リスト



遠坂峠	丹波市青垣町遠阪
楽音寺	朝来市山東町楽音寺579
弁天池	朝来市山東町楽音寺579
茶すり山古墳	朝来市和田山町筒江
生野銀山	朝来市生野町小野字大谷筋33-5
青倉山	朝来市山内
青倉神社	朝来市山内権現谷5

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日